

独立戦車第三中隊部隊略歴

年月日

昭和四年八月
二十四日

概

軍令陸甲方三十一号に依り独立戦車第三中隊縮小下令
縮小完結

要

（17）

0682

第一〇九師團司令部略歴

年月日	概	要
昭五 六 五 七	上陸後昭和二十年二月並硫黄島警備に任じて居た	要買の大部分は内地よりの緊急補充要買補充されている。
三 五	米軍上陸開始と共に司令部の之に対する作戦、指揮命令及び各部隊との連絡に多忙を極め三月八日に至り司令部陣地前方に米軍火砲戦車及び中戦車出撃し米り之と撃戦せるも不成功に終り多数の戦死者を出せり	米軍上陸開始と共に司令部の之に対する作戦、指揮命令及び各部隊との連絡に多忙を極め三月八日に至り司令部陣地前方に米軍火砲戦車及び中戦車出撃し米り之と撃戦せるも不成功に終り多数の戦死者を出せり
三 五	司令部壕入口には火砲戦車進出し米り壕内に大砲放射せる為多数の戦死者を出したり文が為夜間を利用し米多工兵大隊陣地に移動残存兵力を集結方三飛行場附近に斬込みを敢行三月十七日全買玉砕	司令部壕入口には火砲戦車進出し米り壕内に大砲放射せる為多数の戦死者を出したり文が為夜間を利用し米多工兵大隊陣地に移動残存兵力を集結方三飛行場附近に斬込みを敢行三月十七日全買玉砕
歴代部隊長名	中将 粟林忠道 (戦死)	歴代部隊長名 中将 粟林忠道 (戦死)

(之)

大塚中尉

硫黄島臨時野戦貨物取扱歴

年月日	
昭 和 六	<p>一。旧父島に於て備成 備成後硫黄島に進出 米軍は空陸よりの砲撃等の掩護下南海岸及西海岸より上陸猛攻を開始するやカ 一線部隊殆んど全滅す我が部隊は夜間挺身斬込等にて多大の戦果を収めたるも損 耗甚だしく三月初旬兵団命令により重要書類及通貨を焼却全質斬込み玉碎す 部隊長 王計中尉 中村初五郎 (戦死)</p>

(3)

0684

第百九師団防疫給水部隊略歴

年月日	概略
昭和九 年九 月二	硫黄島に於て完結 備成完結後防疫給水勤務に任じたるも 米軍上陸以來遂次損耗激しく三月十七日遂に全員玉碎す 部隊長 軍医少佐 上床 傳 (戦死)

ノ外中邪太

(4)

0685

臨時野戦兵器隊略歴

年月日	概	要
<p>昭 九 二 九 六 九 二 九 六</p>	<p>父島に於て補成 父島に於て補成後流黄鼠に進出兵器補給業務に任じた。 米軍上陸後損耗甚だしく補給困難とおちいたり小隊部隊なるを以って兵 団に合し 三月十七日全買断込み玉棒す 部隊長 中村 高 橋 守 郎</p>	

(5)

0686

第一〇九師団通信隊断歴

年月日	概 要
<p>昭六 昭六 昭三二</p>	<p>東京に於て完結 要員の大部は内地より緊急補充要員補充されている 東京港出港途中小笠原群島父島寄港後任地硫黄島に上陸尔後同島警備に任ずる 米軍侵攻上陸後逐次損害をうけ人員の損失甚だしく三月二十四日隊長森田中尉 升大部は斬込みを敢行戦死す 一部残存人員は兵団長梁林中尉と共に三月二十七日午前四時を期し全員斬込み を敢行玉碎す 部隊長 森 田 中 尉 (戦死)</p>

(6)

この内中印太

0687

混成第一旅団工兵隊略歴

年月日	概要
<p>聖光 五七 三三</p>	<p>父島に於て簡戒 硫黄島進出後陣地の構築並に防空勤務に任じた 米軍上陸以来日夜激烈なる砲爆撃下よく奮闘したるも損失日に増し遂に断込 みやもむきに至り三月十七日全買玉挿す 部隊長 中尉 浅田真二 (戦死)</p>

(7)

0688

運成第二派田司令部

年月日	概要
昭和 六	父島に於て締成
七	上陸後米軍上陸迄硫黄島警備並に防空戦斗に任じた
三 二 五	米軍上陸後連夜熾烈な空襲並に火焰放射により、損耗甚だしく方一回後攻撃敢行 後残存兵力を以て三月八日方二回を敢行大部分玉砕す 部隊長 大佐 干田 真季(戦死)

(8)

2の外中野太

0689

混成第二派団通信隊略歴

年月日	概 要
昭和六 年七 月二 十六	父島に於て備成 父島より硫黄島進出後警備及通信網構成に任ず 米軍の熾烈なる空爆及艦砲射撃について米軍上陸するに及び遂次通信網を破壊 せられ兵力の損耗甚大となる 方一回斬込みを敢行せるも不成功に終り続いて方二回を敢行三月十七日全員玉 砕す 部隊長 小島 二 三 夫 (戦死)

(7)

0690

独立歩立第309大隊踏歴

年月日	概要
昭和五十六年三月二十六日	現地締成完結
三月二十五日	戦斗配備完了
三月二十四日	米軍南海岸三ヶ所より艦砲射撃援護の下に上陸開始 二十四日にいたる間激戦を展開す 此の間殆んど玉砕的打撃を受く
三月二十五日	残存兵力を集結旅団司令部と連絡下に於て陣地に後退す
三月二十八日	旅団主力玉砕と共に残存数名となる
三月三十一日	最後の断崖を敢行玉砕す
三月三十一日	歴代部隊長 粟津勝太郎 (戦死)

(10)

3の内中節太

0691

独立歩兵第三一〇大隊略

年月日	概要
<p>要 三 二 三 三 八</p>	<p>現地に於て締成空結 戦斗愈熾激烈を極め二十八日に巨り大部の死傷者を出す 大隊本部は隊長以下殆ど全滅す 旅団司令部守備たる方ニ中隊は総攻撃に参加数次に巨る斬込みにより多大の戦果を擧げたるも遂に中隊長以下全員壯烈な戦死を遂ぐ 部隊長 少佐 岩谷 為三 郎</p>

0692

独立歩兵第三一大隊戦歴

年月日	概
昭和六	現地に於て編成
三三	米軍上陸開始するや水際に於て之を迎へ撃滅すべく三月十二日に至る阿波次に 巨り斬込み等をもつて奮戦するも大部介戦死す 遂に後退せむるに至り残存 兵力を集中池田隊に合併す
三三	全員突撃を取行玉砕す
	部隊長 少佐 辰 乙 繁 夫 (戦死)

(12)

0693

御歩等三一一大隊踏歴

年月日	概要
昭五 六	現地に於て緋丸完結
三 二 五	米軍南海岸より上陸開始するや水際に於て撃破に努めたが熾烈なる砲爆撃に逐次損失増加
三 四	大部分戦死す
	大尉 長田 謙次 部 (戦死)

(13)

0694

独立歩兵第三一四大隊部隊略歴

年月日	概要
<p>昭和 三二 三 七</p>	<p>現地に於て締戒 *軍上陸以來熾烈なる砲爆撃下戦車及火焰放射器にて奮戦した 半数以上の損耗を蒙る乍後即団命令により北部落に後退隙地構築後反撃に努め たが遂に全買三月十七日玉碎した 部隊長 大尉 伯田 義信 (戦死)</p>

4の収中訂太

(14)

0695

混成第二旅団砲兵隊略歴

年月日	概 要
甲五八	父島に於て締成
五七	上陸
三二一	下旬迄鑿窟に任じた
三二六	米軍上陸後勇戦奮斗せるも熾烈なる空爆及艦砲射撃により隙地は殆ど破壊せられた
三三八	方一回三月十七日方二回の斬込みを敢行全貫玉碎す 部隊長 少佐 前田 一 雄 (戦死)

(155)

0696

混成第二旅団工兵隊部隊略歴

年月日	概 要
<p>甲 五 乙 六 丙 三 丁 三</p>	<p>硫黄島に於て編成 現地硫黄島に於て編成以末警備並に陳地構築に任じた 米軍上陸以末奮戦克く勉めたるも日夜空爆戦車砲に依り損耗甚だしく遂に方一 回陣必し敢行統いて残存兵力を以つて方二回を敢行 全員玉碎す 部隊長 大尉 大塚 憲一郎 (戦死)</p>

(18)

0697

混成第二旅団野戦病院略歴

年月日	概 要
<p>癸 六 三 三 六</p>	<p>東京に於て締成 東京芝浦出帆 硫黄島上陸病院用敵傷病者の収容善護に任じた 米軍上陸せるを以て自衛戦斗を主として敵の攻撃を邀撃す漸烈なる砲爆撃に より六ヶ所のみとなり一時斬込みを敢行するも不成功硫黄島部隊玉砕後四月中 旬隊長以下八名萬田赤十字条約により米軍と手を振り沖繩に送られ米軍傷病 兵の看護に任じた 部隊長 軍医大尉 野口 巖(生還)</p>

(77)

0698

第百九師團高射砲隊部隊略歴

年・月・日	概 要
昭 和 六 年 三 月	父島に於て完備
七 月	硫黄島上陸後警備並に防空戦斗に参加
三 月	米軍上陸後勇戦奮斗勉めたるも熾烈なる戦斗に遂次兵員・火砲の損失増加す
三 月	全員斬込み玉碎す
	部隊長 少佐 栗 庄 太郎 (戦死)

5の4中訂太

第一〇九師團警戒隊略歴

年月日	概	要
昭和六	東京に於て完結	
二二 二五	要員は内地より緊急補充要員補充されている。 米軍艦砲射撃開始	
二九	南海岸より上陸開始五名山、本山を経て東山陣地に米軍侵入す之に対して、三 軒屋方面に斬込みを敢行	
三八	東山方面に侵入せる米軍を隊長以下之を阻止せるも優勢なる米軍の激撃絶大な り、残存兵力を以つて再度斬込みを敢行遂に全員玉碎す。	
	部隊長 中尉 松沢朝哲 (戦病死)	
	少尉 河野幸雄 (戦死)	

(19)

0700

チ一〇九師団突真中隊略正

年月日	概要
昭一九、六、 一九、九 一九、六、一五 二〇、二 三、二七	東京に於て完結 現城縮成 上陸後警備並に防空勤務 米軍上陸後日夜熾烈なる戦斗に依り遂次兵器人員の損失激しく 残存兵力を以って斬込みを敢行全員壮烈なる玉砕を遂ぐ 部隊長 大尉 吉田 克哉

(20)

0701

5の外中節太

附設第三〇教育隊隊部略歴

年月日	概要
昭和六年六月六日	東京に於て縮成
昭和六年六月七日	横浜港出帆
昭和六年六月七日	父島に陸
昭和六年六月七日	父島発同日硫黄島上陸同島警備
昭和六年六月十九日	海軍警備隊配属として米軍上陸迄対空戦に参加す米軍上陸と共に独歩三〇九大隊警戒隊に協力水際戦に奮闘するも熾烈なる空爆撃に依り損耗甚しく
昭和六年六月十七日	残存者全員斬込み玉砕す
	部隊長 少尉 百崎 実明 (戦死)

(21)

0702

600 P. 1

年月日	事
甲午 八月 六	横浜港出帆
七月 七	父島上陸
七月 七	父島出帆同日硫黄島上陸警備に任ず
七月 二	米軍上陸以来奮戦克く努めたるも熾烈なる空爆撃に損耗甚だしく
七月 三	全買玉砕せる模様（生存者一名もなし）
	部隊長 少尉 近藤 勇（戦死）

(22)

特設第二一次肉砲隊部隊略歴

0703

特設第四三機團砲隊略歴

年月日	概要
<p>昭和九 九 三</p>	<p>帝川に於て編成 横浜出帆 硫黄島上陸</p>
<p>三 二</p>	<p>中司西海岸に於て米機部隊を発見之と対空戦闘をす 翌日より米軍は上陸を企 始之と砲戦克く努めたるも方二雁行場を失ふ前に於て我が部隊は歩一四五連隊 の指揮下に入り戦闘を継続す その間数次に巨る斬込みを敢行するも全滅的打 撃を蒙り 戦闘力を失ふにいたる遂に覺を決し残存兵力を集中後最後の突撃を 敢行</p>
<p>三 七</p>	<p>玉碎す 部隊長 中尉 田村 雄 蔵 (戦死)</p>

(23)

0704

特設四四機肉砲隊

年月日	概要
五九八	東京に於て編成
五九三	横浜出帆
十五	硫黄島上陸回富警備
三十三	我師部隊の熾烈なる爆撃に對して対空交戦するも日余に亘り昼夜間斷なき食糧及弾薬欠乏により戦死患者続出し多大の損害を受く
三九	米軍包圍下となり他隊との連絡不能となる既に残存兵刀隊長以下二五名となり死を決し包圍隙を突破東地区戦車隊鈴木少佐の指揮下に入り奮戦する
三十三	全員斬込み玉碎す
三十三	部隊長 少尉 小井 五 為 作 (戦死)

<三>

6の外中訂正

0705

第一〇九師団迫撃砲隊部隊略歴

年月日	概 要
昭和二十三年	<p>部隊人員は硫黄島最後の迫及人員並に、迫撃要員一六〇名が東京港出港 現地硫黄島に於て構成 一月初旬硫黄島上陸後一部迫撃要員により構成せられたものなり 全員玉碎也 るも、迫及要員一六〇名中他隊通信隊要員数名玉碎後重傷の上米軍に收容せら れ終戦後米國より還送せられた者を調査の結果判明した。</p>

(25)

0706

歩兵第一五〇連隊略歴

年月日	概 要
<p>四六 九 日</p>	<p>歩五〇が衛成地松本市を去って関東軍隷下に入るに及び歩一五〇が一六、四八、松本市を衛成地として締成さる 出動の急締制者 当初の装備、歩三六、迫撃一六（五二師団隷属） 衛成地の装備、歩三六、小砲一六、工兵一中、輸送一中、工生一隊（隷属師団如故） トランク島上陸、三十二軍に属し同島警備 終 戦</p>
<p>三三 九 日 三三 九 日 三三 九 日</p>	<p>参加せる主要なる作戦（警備、戦斗、行軍輸送）の概要 輸送、松本―守呂―内司―横浜―トランク島 戦斗警備、特記事項なし 終戦より帰還迄の行動の概要 部隊の三分の二は直轄内地へ、残部は道路、飛行場の建設補修、沫雷除去作業を終了 全員帰還</p>
<p>三三 一 日</p>	<p></p>

(26)

0707

海上機動第一旅団機動第二大隊略歴

昭大、三、七	<p>瀋州國札爾七を出発 安東釜山を経て南洋トランク島を経て</p>
光一十	<p>マーシャル群島グエゼリン島</p>
三十一	<p>ウオエツケエ島及マロエラツア島に上陸せり 終戦迄同地守備に任じ附近の戦</p>
光三六	<p>斗に参加す クエゼリン島は部隊主力玉碎せり</p>

(27)

0708

フの外中印太

(28)

0709

海上機動第一旅団衛生隊取組三三八訂隊略歴

年月日	概要
昭和三十七年十一月十二日	<p> 茨州園部々浸出発 安東釜山トランク島経てマーシャル群島マロエラン^ノ島 同地派遣隊に配属せられ上陸せり 終戦迄同地にありて守備及戦斗に参加し終戦に至る </p>

(30)

0711

昭和十一年三月

第一四師團司令部

年月日	
概	<p> 縮小地 滿州チケハル 補充擔任部隊 守部宮以D司令部 終戦時位置 バラオ島 歸還上陸地 湘 賢 復員年月日 第二十二年三月八日 (縮小別紙行動要因軍隊区文参照) 大軍出発 バラオ島上(バラオ地区陸軍司令部官) 陸軍約一八五〇〇 海軍約六四〇〇 南洋庁官約一六五〇〇を指揮す バラオ諸島及ヤップ島にある各部隊を指揮し 陸上初備に任じ約兵士気圧益 に敵の上陸に備へ之を救すべく対攻斬込訓練に兼成補強に理食糧 自若強化に 進し在りたり終戦前後の同島状況は別冊中大佐の状況報告参照のこと </p>

(37)

0712

歩兵第二連隊部隊略歴

年月日	概	要
昭和十九年三月三十日	編成地 滿洲黑河省 五	編成年月日 昭和十九年三月三十日
昭和十九年三月三十日	補充擔任部隊 水戸東部三十七部隊	終戦時位置 パラオ諸島パリスノ島玉砕
昭和十九年五月十五日	歸還上陸地 蒲 檳	復員年月日 昭和二十二年五月十五日(一部生還者)
昭和十九年八月十七日	卸買下同編成完結大連八十七上船	パラオ諸島コロル島上陸
昭和十九年八月十七日	ベラリユー島上陸爾後同島の警備に任ず	米軍同島上陸開始の文戦
昭和十九年八月十七日	部隊全員戦死と認定	生有者二十一名山口少尉指揮浦買上陸復員す

(32)

8の外中卸大

0713

歩兵第十五連隊略歴

年月日	概要
昭二一、一、一四	<p>編成地 蕭州チケハル 補成年月日 一九、二、一四 補充擔任部隊 高崎東部二八部隊 終戦時位置 パラオ島 帰還上陸地 補 賓 復員年月日 昭二一、二、二六 駐屯地 蕭州国チケハル出発 大連出帆途中 鎮海、門司、横浜、館山、久島(十八日同滞存) 寄港 パラオ島上陸後同島警備に任ず オニ大隊はバ島に於て玉砕(兵一七生還) オニ大隊は上陸敢行玉砕せるもオニ中隊の一部は途中より復歸生還者あり復員 は弱兵なり返次帰還し及新飾一中隊はコロール島清掃後帰還 最後部隊 補賓上陸解散</p>
昭二一、一、一八	
昭二一、一、二四	
九、一、二八	
昭二一、二、二六	

歩兵第五十九連隊部隊略歴

年月日	概
三 一 八	浦賀上陸部隊復員
九 五	連日の空爆下本島守備に任じ終戦に至る
七 三	敵アンガウル島上開始守備隊長後藤少佐以下全員戦死
七 三	パラオ本島に転進（一ヶ大隊と残す）
四 三	アンガウル島守備
四 三	パラオ島上陸
三 三	復員年月日 昭和三十一年一月六日
三 三	終戦時位置 パラオ島
三 三	補充擔任部隊 中郷宮東部隊第三十二部隊
三 三	編成年月日 昭和十九年三月五日
三 三	締次地 首途爾
三 三	復員年月日 昭和三十一年一月六日
三 三	終戦時位置 パラオ島
三 三	補充擔任部隊 中郷宮東部隊第三十二部隊
三 三	編成年月日 昭和十九年三月五日
三 三	締次地 首途爾

第十四師団戦車隊略歴

年月日	概要
五 三 天	<p>縮成地 瀬河ヶヶハル 縮成年月日 昭十九 三 五 終戦時位置 八島玉砦 パラオ本島 大連出張</p>
四 三 五	<p>パラオ島ペリリユ一島上陸</p>
九 五	<p>以東不眠不休陳地構築飛行場整理に徒事 米軍同島強襲を加へ来たり上陸を開始す 同島指揮官中川大佐を中心を將兵一丸となり策謀勇戦敢斗したるも敵の 近代化学と數倍に余る兵刀を以てする強襲に対し最後の兵に至る迄肉 攻切込を敢行多大の損害を喫へ</p>
十二 五	<p>全員玉碎したことを認定する</p>

(35)

0716

第十四師團船重隊

年月日	概要
昭和九 三 五	備成地 滿洲々々ハル
九 三 五	備成地 大連港出発
四 三 五	横浜寄港
四 三 五	父島出発
四 三 五	ペラオ島コロル島上陸 島内御配備の兵站輸送業務従事す
九	米軍の空襲熾烈となり 自動車輛による搬送困難となり背負う輸送隊を備成して輸送業務を遂行す
三 二	糧秣の缺乏甚しく主力を自活耕作に指向す
三 一 十	羽賀上陸解隊復員す

(36)

0717

第十四師團兵隊勤務隊略歴

年月日	概	要
昭和三年五月	編成地 今ヶハル	
三	編成年月日	
三	第十四師團編成下令	
三	編成完結	
三	南海派遣の爲今ヶハル出発	
三	大連出発	
四	横浜寄港	
四	館山出発	
四	小笠原父島寄港	
四	同港出発	
四	パラオ島防備	
六	パラオ島防衛	
七		
七		
九	中部太平洋第一次パラオ作戦参加	
九		
六	十二、三十一 同二次作戦参加	

第十四師團經理勤務隊部隊略歴

年月日	概要
癸 三 五	編成地 燕洲ヶケハル 縮成完結
三 天	旅順集結同日大軍出発 横浜―父島を経て
三 岳	パラオ島上陸爾末同島警備に任じ終戦に至る
三 八 五	終戦爾末帰還迄自若耕作をして数次の帰還により 稍實に於て復員す

(39)

0720

第十四師團野戦病院略歴

年月日	概	要
三 五	締成年月日	
三 三	締成地 茨州国龍江省ナケバル	
三 三	チハル出港	
三 三	関東世界通運同月移順着	
三 三	大連港出港	
四 三	横浜寄港	
四 三	同港出港	
四 三	パラオ島コロル島上陸	
三 五	本院をパラオ本島(大和村)ペ島にオ一分院をアンガウル島にオ二分院を派遣す	
三 五	ガspan地区にオ三分院を派遣す	
三 五	アンガウルオ二分院の半分(將校以下五九名)本院に復帰	
三 五	バ島に米軍上陸	
三 五	アンガウル無に米軍上陸し一三三一戦死認定さる 終戦時送患者収容警備 自	
三 五	若等航行	
三 五	終戦	

10の外中野大

(40)

0721

三 三 三	年 月 日	都 隊 一 部 歸 還 全 部 歸 還 後 買 寸	概
			要

(27)

0722

南洋連兵隊方十四師團連兵隊略歴

年月日	概
昭和四年四月	<p>縮成地 パラオ本島</p> <p>縮成年月日</p> <p>南洋連兵隊臨時縮成下</p> <p>完備 將校以下三八名 雇傭人八名</p> <p>本部一分隊はガスバンミス橋南方ニテに移る 更に二一五北方四村の漸中 に移る</p> <p>南洋連兵隊廢止方三十一A司令部に増加配属さる</p> <p>在パラオ島連兵隊本部及方一分隊將校以下十九名方十四師團司令部に増加配属</p> <p>トラック島方三分隊六名は三十一A司令部に増加配属</p>

(タヌ)

年即天

以

0723

独立自動車四二大隊所歴

年月日	概要
昭和九年五月	<p>編成地 東京都(津田沼)</p> <p>編成年月日</p>
大正四年	<p>ミンガポールより南洋諸島 バラオ島に進駐爾後補給基地輸送業務に従事</p> <p>以降同島戦場輸送に従事 終戦に至る</p>
昭和八年	<p>戦場整理に従事</p>

(43)

0724

特設陸上勤務第七中隊

年月日	概要
昭和三十三年三月	<p>緬成地 ジャワバンドン 緬成着す 全 完結</p>
昭和三十三年五月	<p>ジャワスラバヤ港出発 南洋群島パラオ島上陸</p>
昭和三十三年八月	<p>オヤヤ兵站地区隊司令官の指揮下に入り全島の整備 同島にて武裝解除</p>
昭和三十三年九月	<p>パラオ島出発</p>
昭和三十三年十月	<p>補資上陸 復員</p>

(44)

//の外半部本

0725

第百二十三兵ノ站病院略歴

年月日	概 要
昭十八 三十一	<p>縮成地 弘前(陸軍病院)</p> <p>勸買ノ完結同日弘前出発</p>
三十一	<p>宇岳港出発</p>
三十一	<p>パラオ島コロル島マラカル港上陸本島瑞穂村着</p>
四 三九	<p>同島アラカベサン海軍航空隊舎に兵站病院附設</p>
× 七	<p>小泉軍医中尉以下一〇名ニエーギニヤ方面に分遣</p>
三十一	<p>コロル島に病院新築移轉</p>
三十一	<p>空襲致しく逐次本島カスパンに移動分院をアイミンキーに置き患者收容</p>
三十一	<p>後送に従事以降現地自活作業</p>
三九	<p>乗船(S.T.)により浦賀ソ上陸</p>
三九	<p>解隊</p>

(45)

0726

海上機動第一旅団輸送隊略歴

年月日	概 要
昭和一	<p>締成地 比島 バネイ島 イロイロ市 締成年月日</p>
二 二	<p>工兵第一連隊に於て独立工兵二連隊ニ締成</p>
三 二	<p>柳川兵団の指揮下に入り抗州灣上陸作戦に参加主として中支方面の作戦に参加</p>
大 九	<p>南方東方進を命ぜられ朝鮮釜山經由比島バネイ島イロイロ市に到り発動艇の訓練を実施</p>
花 一	<p>同イロイロ市に於て海上機動第一旅団輸送隊を締成</p>
花 一	<p>イロイロ市出發 パラオ島 コリリユ一島に到り同島諸防衛隊地作業に従事後</p>
三 二 三	<p>パラオ本島に於て島防架輸送隊に從事し終戦に到る 復員</p>

(46)

この大中郎太

0727

第五十七兵站地区隊及同第五七中隊

年月日	概	要
<p>七 二 七</p>	<p>縮成地 姪路中部四十二部隊 中部四十二部隊に於て縮成 守備出発</p>	
<p>七 二 八</p>	<p>南洲国牡丹江省○陽縣○東に到着同地警備 ○陽縣○西に転進同地警備</p>	
<p>九 五 五</p>	<p>南方転進の熱同地出発同経由釜山到着輸送船 才真到着同地道路作業及警備勤務從事</p>	<p>三池丸に集船マニラ經由バラ</p>
<p>七 三 三</p>	<p>ペリリュー島防備の爲部隊解散独立歩兵第五十三旅団三五四大隊(引野大隊) 及其他縮成者</p>	
<p>七 三 三</p>	<p>復員</p>	

(47)

0728

第三野戦防痾給水部隊略歴

年月日	概	要
昭和二十一年一月十六日	編成地 東京都東部六部隊	
昭和二十一年一月十六日	編成年月日 昭和二十一年一月十六日	
昭和二十一年一月十六日	補充擔任部隊 東部六部隊	
昭和二十一年一月十六日	終戦時位置 バラオ島	
昭和二十一年一月十六日	帰還上陸地 蒲賢	
昭和二十一年一月十六日	復員年月日 昭和二十一年一月十日一部隊二十年十日未	
昭和二十一年一月十六日	第四軍に關し 鹿林に駐屯	
昭和二十一年一月十六日	大連出発	
昭和二十一年一月十六日	佛印西貢上陸南方統軍隷下に於て主力要員一部をコサンジマックルコブノンペン艦谷軍及十五軍と配属ビルマに派遣	
昭和二十一年一月十六日	部隊集結の上戦用の為西貢出発一艦谷を経て昭南港上陸一南洋パラオ島上陸	
昭和二十一年一月十六日	一八軍隷下に入る	
昭和二十一年一月十六日	一部はコニユーギニアに出発爾後コウエマクルに於て一〇七兵站病院に編入	
昭和二十一年一月十六日	さる道路ト絶状不明となる	
昭和二十一年一月十六日	主力はス等バラオに於て一四日の隷下に在り終戦に至る	

(48)

本報中外部

0729

パラオ兵手節略歴

年月日	概要
昭和八年一月	台湾軍に於てパラオ兵手節を編成
九廿三	高雄港出發
十月	パラオ島上陸後直に業務開始
十一月	終戦に至る
十二月	内地師還の者パラオ港出發
一九四六年一月十日	復員

(49)

0730

特設才三工 後開砲隊踏歴

年月日	概 要
一九五九	<p>縮成地 大阪府下信天山(四四八)</p> <p>縮成年月 昭十九 五 十九</p> <p>補充擔任部隊 中部八八部隊</p> <p>終戦時位置 南洋群島パヲオ諸島ヤツプ島</p> <p>帰還上陸地 浦賀</p>
昭十九	<p>復員年月日 昭二十 十二 丁五</p> <p>オ十四師団駐居の為大阪港出帆</p> <p>門可港出帆</p> <p>基隆入港</p> <p>マニラ入港</p> <p>セブ港入港</p> <p>ダバオ入港</p> <p>パラオ島入港</p> <p>ヤミブ島上陸</p> <p>同島指揮官(少将) 江藤大佐の指揮に入る</p> <p>以降連合軍の爆撃集中下に戦斗任務と併合して食糧自活生活を続行終戦に至る</p>
え二	
え九	
六三	
七一	
七三	
七四	
七六	
七九	

少中尉太

(50)

0731